

歩いているときに前に進もうとする人は、自然と前を向いて歩きます。言い換えれば、前進しようとする人は、同時に後ろを向くことはないということなのです。

このことは、精神面においても同様で、物事を前に進めるには前向きな思考が肝要です。ところが人は「物事を前に進めたい」と願いながらも、思考が後ろ向きになってしまふことがあるものです。逆境に立たされた時、その状況を嘆いても、状況は好転するものではありません。

Yさんが入社して間もない約二〇年前のこと。配属先の営業部で、地域の家を訪問し、自社商品を勧めて回ることになりました。営業経験のないYさんは、マニュアルにあるセリフを頭に叩き込み、緊張感の中で家々のインターホンを押してまわりました。何件か留守宅が続いた後、初めてインターホンから声が返ってきました。

「こんにちは。〇〇社のYと申します。この度は…」と、マニュアル通りのセリフを言葉にすると、途中で「結構です」と切られてしまいました。その後も、「必要ありません」「迷惑です」と言われ続け、時には罵声にも近い言葉も浴びせられました。

結局、午前中の成果は0でした。前日まであったやる気は削がれてしまい、どうせ次の家も断られるに決まっている…と意気消沈してしまつたのです。

お昼休憩の際、午前中の状況を先輩に打ち明けると、先輩は「訪問販売は対応してくれる人の方が少なくって当然だよ。私は対

朗らかな心は まわりを一変させる



応してくれないことに嘆くのではなく、対応してくれたことを喜ぶようにしている」と、営業の心得を語ってくれました。

その先輩は、午前中だけで三つ売り上げたと言います。暗い心では、物事は好転しないと感じたYさんは、明るい心を保とうと決心しました。

午後の営業では、午前と比べて状況の受け止め方が変わりました。午前中は、ただ嘆いているだけでしたが、どうしたらこの状況を打破できるかという建設的な考え方に変わったのです。

Yさんが苦慮したのはインターホン越しで断られてしまうことでした。なんとか顔を見て話がしたいと考えたYさんは、商店街の店舗や、街を歩いている人にも声をかけるようにしました。結果として、それが奏功し、良い出会いにも恵まれ、午後は四つを売り上げることができたのです。

倫理研究所の創設者、丸山敏雄は著書『人類の朝光』において、「明るい心」の効用について、次のように述べています。

朗らかな心は、まわりを一変させる、なごめる、おし開く。(中略)明朗は、積極的であり、建設である。

人の心は、車のヘッドライトのように、暗い中にあっても、明るい人が行く先は、明るく照らされるものです。つまり、状況や環境は自分自身の心が作り上げるのです。順境の際は誰でも明るくいられますが、逆境こそ明るい心と前向きな考えをもって、物事を前進させたいものです。